

○平成30年度奨励研究

「非明示的な「ほめ」が持つ対人距離縮約効果について」

○研究代表者 人間科学センター教授 佐藤純

○研究分担者 人間科学センター嘱託助手 大久保龍寛

1. 研究目的

人と人との間にある対人距離を左右する方法にはいくつかの選択肢が存在するが、中でも言語は日常的に最も用いられるものの一つである。例えば、親しい間柄（親友関係や家族関係）であるにも関わらず、話し手が尊敬語を用いてしまうと、対人距離が拡大してしまい、聞き手の気分を害してしまう。このように、不適切な用法により対人距離が拡大してしまう一方で、適切に使用されれば対人距離の縮約を可能とする言語表現がある。その代表例が「ほめ」である（以下、ある種の言語行為としてほめを示す際は「 \square 」で括る）。

- (1) (数学の難問について論理的な解答をした武藤刑事を数学の天才少女である浜村渚がほめている)

「すごい、武藤さん」

浜村渚は小さく拍手をしながら、顔を輝かせて喜んでいた。口元には、アワビステーキのソースがついていた。

「すごいすごい、その答え、いただきです」

僕は嬉しくなった。・・・

(青柳碧人著 『浜村渚の計算ノート3 さつめ—水色コンパスと恋する幾何学—』)

(1) は数学の難問について明解かつ論理的な解答をした武藤刑事を数学に関して天才的な才能を持つ女子中学生の浜村渚がほめている場面である。「顔を輝かせて喜んでいた」という表現からも明らかのように、渚は嘘や建前で武藤をほめているわけではないことがわかる。また、武藤が渚のほめを素直に受け取っていることが「僕は嬉しくなった」という武藤の心の声からうかがいしれる。このように、「ほめ」を行使した側が誠実に「ほめ」を行いかつ「ほめ」を行使された側がほめられたことを素直に受け取っている場合にのみ話し手と聞き手の対人距離が縮まると考えられる。このことは以下の例からも確かめられる。

- (2) (殺人事件の関係者である羽原全太郎は刑事から事情聴取を受けたが、事情聴取の前に元警察官である武尾徹からアドバイスを受けていた。そのアドバイスの意図について全太郎が武尾に問い質し、武尾から納得のいく解答を得られたことに対して)

「そういうことか。いや、大したものだ」

羽原は感心したように何度も頷くが、さほど大したことではないと思っている武尾としては、視線を落とすしかなかった。・・・

(東野圭吾著 『ラプラスの魔女』)

「感心したように」という表現からもわかるように、羽原は心から武尾をほめている。その一方で、武尾は、アドバイスの内容のみならずその発想自体も「大したことではない」と考えているため、羽原のほめを素直に受け取ることができない。このことは「視線を落とすしかなかった」という表現からもうかがえる。このように、適切な条件を満たしていなければ逆に話し手と聞き手の対人距離が拡大することにもつながってしまう。(1) や (2) のように「すごい」や「大したものだ」といったプラスの評価を与える表現を用いた「ほめ」を本研究では明示的な「ほめ」と呼ぶ。

一方で、Boyle (2000) が指摘するように、プラスの評価を与える表現が使用されておらず、ほめであることが表面上は明示されない「ほめ」が存在する。このような「ほめ」を本研究では非明示的な「ほめ」と呼ぶことにする。(3) はその一例である。

- (3) 「渚ちゃん。あなたが、私のメッセージを受けとってくれたのでしょ？」

「え？」

目を見開く浜村渚。

「数学が好きそうな顔、してる」

「ありがとうございます」

(青柳碧人著 『浜村渚の計算ノート3 さつめ—水色コンパスと恋する幾何学—』)

「数学が好きそうな顔、してる」という発話はそれ自体には「すごい」のようにプラスの評価につながる表現は存在していない。それにも関わらず「ありがとうございます」と渚が返答しているということは、渚は当該発話を「ほめ」と認識しているということである。

以上のように、「ほめ」には明示的なものと非明示的なものの二種類が存在するわけであるが、ここで一つの疑問が生じる。すなわち、「相手をほめたいのであれば明示的な「ほめ」のみで十分に事足りるはずなのに、何故非明示的な「ほめ」なるものが存在するのか」という疑問である。本研究の目的は、この疑問に対し、ポライトネス理論 (Brown and Levinson 1987, Leech 2014, など) の観点から、解答を与えることにある。

2. 研究方法

① データの収集

「ほめ」と思しきデータを小説から収集した。小説を選んだ理由は、(1) や (2) から明らかのように、当該発話が「ほめ」と認識されているかどうかが登場人物の心内発話から識別可能となるという利点があるからである。また、同様の手段により、プラス評価表現を伴わない発話が非明示的な「ほめ」と解釈できるか否かの判断を下すことができるという利点もある。

② ポライトネス理論に基づく分析

①の手順で収集したデータをポライトネス理論に基づき分析した。特に、本研究が採用したのは、Brown and Levinson (1987) のポライトネス理論である。当該理論によれば、人はそれぞれ「消極的フェイス」(negative face) と「積極的フェイス」(positive face) なるものを有している。前者は「他人に縛られたくないという欲求」であり、後者は「他人に受け入れてほしいという欲求」である。話し手と聞き手は両者のこれら相反する欲求をうまく汲み取り、互いの対人距離を調節しているとされる。また、Brown and Levinson によれば、両フェイスが侵害されそうな場合には、その侵害を回避あるいは緩和するための措置として、「消極的ポライトネス」(negative politeness) や「積極的ポライトネス」(positive politeness) が行使される。消極的フェイスは、例えば、話し手が聞き手に対し「命令」する場合に大きく侵害される（この場合は聞き手の消極的フェイスが脅かされている）。このような侵害を回避・緩和するために、話し手は「申し訳ないんだけど～してくれない？」のように「命令」の押しつけがましさを低減する方略を駆使する。また、積極的フェイスが侵害される例としては「意見の不一致」が挙げられる。話し手の意見に対してあからさまに「それは違うんじゃないかな」といった反対意見を表明すると聞き手との対人距離が拡大してしまうことにつながる。このような場合に「君の意見も一理あると思うけど」のように前置きをしてから反対意見を表明することで積極的フェイスの侵害が緩和されることになる。

3. 研究結果

明示的な「ほめ」は、(2) でも確認したように、聞き手との関係性によっては聞き手のフェイス（おそらくは消極的フェイス）を侵害する行為となる可能性がある。また、明示的にほめられると聞き手は謙遜を強いられることになる（例：A：「こんなに難しい問題が解けるなんてさすが医者の子だね」 B：「そんなことないですよ」）。これは自身の言動を束縛されることにつながるため、消極的フェイスの侵害行為とされる。本研究の主張は、このような不用意なフェイス侵害を避けつつ聞き手をほめるために非明示的な「ほめ」が用いられている、というものである。非明示的な「ほめ」では、言語形式上はプラスの評価を示す表現が表出しておらず発話の解釈が聞き手に委ねられることになるため「ほめ」以外にも多数の解釈が可能となる。聞き手には複数の選択肢が存在することになるため、聞き手の消極的フェイスの侵害を引き起こすことがなくなると考えられる。これは Brown and Levinson (1987) が提唱する消極的ポライトネスの一種で「両義的な言い方をせよ」という方略に相当すると考えられる。

4. 考察（結論）

本研究の分析が妥当であるとするならば、非明示的な「ほめ」は、消極的ポライトネスであると同時に積極的ポライトネスとしても機能していることになる。「ほめ」の基本的な機能は相手との対人距離を縮めるというものであるからである。このような同時性を示す言語表現が他に存在するかどうかは今後の研究課題となる。

5. 成果の発表（学会・論文等、予定を含む）

本研究の一部は言語処理学会第25回年次大会にて発表予定である。

6. 参考文献

Boyle, R. (2000) “‘You’ve Worked with Elizabeth Taylor!’: Phatic Functions and Implicit Complements” / Brown, P. and S. Levinson (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage* / Leech, G. (2014) *The Pragmatics of Politeness*